
「嫌な事は出来るだけ見ないように」

マリオネ

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「嫌な事は出来るだけ見ないよ！」

【Zコード】

Z0058BA

【作者名】

マリオネ

【あらすじ】

夜空と小鷹のSUSです。

時系列等は特に気にせず、なんとなく楽しんでいただけたら幸いです。

登場人物の言葉づかい等が変でしたら、指摘していただけると幸いです。

おそらく2話で終わります。

放課後から俺の一日は始まるといつても過言ではない。なぜなら俺には友達がないからで、そんな奴の学校生活なんて想像に容易いだろうが、アレだ。

朝、学校に来る。昼、飯を食う。夕方、何をしようか迷う（もちろん一人することに限る）とこう繰り返しになる。ほら、なんとかくキツイ様な気がすると思う。

ただ、俺には幸い、大切にしなければいけない妹がいる。たぶん、この妹がいなかつたなら俺はきっと学校だけでなく、家でもテレビ位にしか喋る人間（？）がいなくなり、

学生生活と青春と言う掛け替えのない大事な時期をおそらくもつと陰鬱に過ごしていただろう。言つておけば、寂しくないなんて思つたことはない。

い。ベッドに入れば明日の学校に

不安を覚え、朝起きたら休み時間と言つ拷問Timeに陰鬱な気持ちを覚える。そんな学校生活。青春。

なんていうか、そんな感じの学校生活を送つていたのだが、転入してからヒヨンなことで知り合つた三日月夜空という美少女と隣人部という部活を立ち上げることになつた（ほほ無理やり）。

まあそこからなんやかんや色々ありながらも隣人部にも人が集まつて、なんだか友達作りに必要な為の技術やら経験値を集めながら色々したとおもう、いや、集めるために色々やつた。

ロードトワリージュード。みんなで色々やつたものの、特に友達が増えたわけではなく、むしろクラスメートや学校の一般学生からはもっと嫌われた（近づき難くなつた）と思つ。たぶんきつとそれは現実だと思う。

それらの詳しい出来事は野暮なので俺は語りたくない。むしろイタイ事ばかりで、これまでした事を言葉に直して傷になつてしまつた

ら嫌なのでいろいろ仕舞つておこうと思つ。ふふふ心いたい。

「おい小鷹、気持ち悪い顔して変な顔をするな気持ち悪いぞ。また妄想か？まさか私と同じくエア友達を作つて心で会話してたのか。寛大な私はその低俗な猿真似を許してやるから

取りあえずそのエア友達を話してみる。クオリティ如何によつては死んでもいいんだぞ」

「そんなんつくんねえよ！」

一人で考えていたら諸悪（？）の根源。三田円夜空が話しかけてきた。後、気持ち悪くはないんだぞ、夜空よ。え、そんな顔すんなよきもちわるくないよホント。

「…安心しろ。私も鬼ではない。エア友達ビギナーの貴様に高い技術を要求してるわけじゃない。ただ貴様の場合エア友達ではなく単なる妄想かもしれないからな。私が正してやる」

いや、悪鬼の類にしか思えないよ。あの幼馴染は強く成長したんだな。うん、すぐーや。ていうかエア友達つて妄想の類じゃなかつたんだなこいつの中で。

「まあ良い。今日の私は気分がとても良いのだ。黙秘を許そひ」さあ崇めよとでも言いたそうな顔をしている。教室での調子で喋るとは、おそらく今日はとても調子が良いのだろうが、その内容を聞くとおやじけじけじけちは落ち込んでしまうだらうから聞くのはよしておこうと

思うんだけど、夜空は聞いてくれとばかりに顔をかがやかせている。聞かないけどな。

「何があつたんだ夜空。だる、小鷹が言いたいことは。なあに、心が読めるわけじゃない、単純だなあつて感心してたといふだ気にするな」

「なんなんだよ！？……しかも思つてること違つしち…！」

ものすごい笑顔でこんなことを言えるこいつは本当にすげえことと思つ。誰もが振り返るようなこの可愛い笑顔で違うこと言われたら破裂しそうになるんだろうな。でも違う言葉はきっと

出ないので（でても他の罵倒だろう、本人は罵倒とわかつてゐるから
らんけど）その心配はしなくてもいいんだろうな。でもそういう心
配もしてみたいな、なんて。

改めて良く夜空を見てみると本当に美少女だ。ほんとうに性格は神
様が絶対悪戯したとおもう。悪ふざけだよね、神よ。

「改めて良く夜空を見てみると本当に美少女だ。」

「え、それ、あ、い？！」

しまった！口に出た！

「あああああああ！…そつだ夜空！そんな気分いいなんて珍しいじ
ゃん！何があつたんだ！？」

「……ぼそ……* * ガ……ぼそぼそ……」

「え、なんだつて」

なにかを咳きながら夜空は顔を真っ赤にしながら教室から出て行つ
た。その後の放課後まで夜空は帰つて来なかつたが、正直助かつた
と思う。

「あ、今日部活休むのいつの忘れてた」

なんて他のことを考えて「まかすこと」にした。今日は金曜日なので
月曜日まで夜空と顔を合わせることもないのに、次ぎあつときには
お互い忘れてるだろ？

と言つわけで取りあえず理科当たりに今日は部活に行かないとメー
ルを送つておき帰ることにした。

from 理科

今日は理科も用事があるので休むつもつだったので、夜空先輩に転
送しておきます

どんな用事かつて？きっと先輩の頭の中で理科は舐られてるので
しょう。もつと卑猥な想像してくれてもいいんだぜ。ハアハア……

『「ありがとう』と送り返しておいた。
理科からの返信がよく解らないくらいハイテンションだったので取
りあえず無視しておいた。

そんなわけで、家に帰つて親父の知り合いであらう人から送られてきた品物を受け取つた俺は、久々の部活のないふわふわとした時間を過ごす。そうかと思い取りあえずコーヒーでもいれるかなあ、小鳩に豪華な夕食でも作つてやるかなあなんて考えていた時に、携帯がなつた。

「ん？ だれだ」
ポケットから取り出すと、ディスプレイには、三日月夜空と表示されていた。なんかあったのかな？

「……………」

しまった、あまりの剣幕に驚いて切つてしまつた。あ、また掛つて
きた。

「なんであるのよーー小鷹のへせに生意氣だぞ貴様ああああああ

「おちつけ夜空、こわいぞ」

「いや、なんかさういふ事はない」

もうなんだろう。噛んで冷静になつたのか落ち着いたのかもうそれ以上は奇声を上げる事はなかつた。

「ううう……今日はなんで休んだんだ……」

「ああ、家に荷物が届く予定だつたから」

「嘘だな。人見知りが激しい小鷹が、宅配人から荷物を受け取るまでのプロセスを完了できるはずがないだろう」

「デモノトコロ」

「むつ。 そうだつたのか。 偉いぞ小鷹！」

なんか褒められた。多分馬鹿にされているのだろうけど。

一 もう用事は終わったのだが、なら早く」

無茶な注文を…でもまだ時間はも早じて血しかな…で思ひ止む

「今から学校だと少しあしかかるぞ。なにかやるのか？」

「安心しろ」

なにがどうか。

「今日の隣人部の部活は課外活動だ。お前の家の方角に出るつもり」「う時間の心配はしないでいい。二時から二時三十分までだ。出来ら

だけ早く来い、場所は……」「

なんか物凄い速さで決まつて いるけど

「ち、ちょっと待った

「なんか文句でもあるのか？」

「色々しゃべなうすもなしけ!?」

そういう運びになつた理由とかもつと教えてくれてもいいと思う

「来たらわかる」ブチつ

……切りやがったよあいつ。でも特にこれから用事もないし、取りあえず準備でもするかな。

「来たか。」

集合場所に着くと、すでに夜空が待っていた。

「悪いな、待たせちまつたか？」

夜空の格好は制服ではなく、普段着にしている飾り気のない黒いジャージでもなく、夜空の言うボーアイシッシュな格好だった。

「あれ、お前制服はどうしたんだ?」といふか皆は?

皆も一度着替えて帰ったのだろうか?

「いないぞ」

は?

「その心は」

「全員用事だ」

「あー」

確かに理科は休みだったがあの幸村が俺に連絡もなく休むだろうか? あいつそう言うところが真面目なはずだが。

「小鷹と私しか居ないが隣人部を休みにする事もないだろう。しかし二人での部室と言うのも寂しかろう。それに友達の友達は友達ではないと言う言葉通りやはり遊びに行くという行為は一人で行うべきだと思ったのだ。わかったか。なら行くぞ」

「いっがそう確かにそうなのだが。

どうか本質的な質問には答えてもらつていないような気がする。

第三回

四
六

先を歩く夜空の耳が赤くなつてゐるよつた氣もする。

まさか！？隣人部を揺るがすような問題があつて俺に相談を求めてきたか！こいつがそういう事を俺に相談しようとすることは……。相

当な事なんだろうなあ多分。

「ところで小鷹、どこか行く所ではあるか?」

問題なもぞ」と、どうか何処行くかを決めてなしんたごして

「確か」アーヴィングの「預言者」の

は聞くな。

といった適当な喫茶店に入り、とりあえず定番っぽいブランドコーヒー

ヒーを一人で頼んでみた。

一人用の元一フルに座り、二ヒビキを飲んでみる。そんなにおいしい!!

「はい

あ

「うわあ！－！」

夜空が急に声を出すもんだから「一ヒー」を口にしてしまった。

「なんだってんだ!?」

ね、猫力云々

「……」

だつたし、また行きたいとも言つていただけど。

「こんな評価のしにいくよく解らん」コーヒーなんか飲まずに猫力フエ行けばよかつた……。ぐそ、忘れていた訳では無かつたけどなぜ

あそこだつたら多少味の誤魔化しがあろうとも猫の補正が…」

よっぽど猫力フューリーに執着しているらしい。というかこいつさり気無く此処の「コーヒー」の事を馬鹿にした後猫力フューリーも馬鹿にしたぞ。あ、猫が主体だから別にいいんだ。

「はあ、まあ良い。良くは無いがな。しかし此処の「コーヒー」は良いところが一つもないな。何を売りにしているのか解らん、クソ。意地を見せる意地を」

「俺はお前が何を言つているかわからぬ」

「解らないだと?はつ。歌だつてそうだらう。別に曲の良し悪しなんかよりも、歌つてる奴がカツコいいだの可愛いので曲の良さが変わるんだらう?」

「それもの凄い失礼だよ!とこいつか質問にも答えてねえ!?」

「名曲はクソだと言つておいつ」

「あやまれよ!本当の名曲たちにあやまれよ!」

こいつ悔しさのあまり色々なものに当たりはじめやがつた。必死にツツ「ミミいたもの」「うわ、なんだこいつ」見たいな目で見てやがる。

「要するに、猫力フューリーに行く選択肢を出せなかつた自分への怒りは他にぶつけようつて事だろ」

「私は悪くない」

あ、そつぽ向き始めた。

「そう言えば音楽と言えばだな。最近の映画でもアニメでもリア充共はバンドをやることが一種のステータスらしこぞ」
たしかにギター・ケース何かを担いで気分よきやうに歩く学生をよく見るようになつたが。というか話題の振りおかしくない?え、音楽やる方向でまとめられる奴なの?無理だろ。

「だからギターケースに荷物を入れて学校にきたらそれだけで友達が出来そうじやないか」

よかつた、やらない事前提で話が進みそうだ。

「でもケースの中から筆箱でてきたなんか嫌じやないか?」

「譜面に何か書く為に書くものは必要だらう。馬鹿だなあ小鷹は」

なんで馬鹿にされたの？いいけど、別にいいけど。

「でもギターを買う気はないんだろ？ケースだけ買ったとして、教科書と筆箱しか入れてなかつたらケースがフニャフニヤになるんじやないか？」

「綿でも入れておけばいいだろ？軽いし。」

「もうホント最低だな」

あの男らしかつた幼馴染はこうなつたんだなあ……。あれ涙が。「だいたい音楽やつてる奴なんて頭がパーなDQNが多く見られているだろ？ その効果で私の近寄りがたい雰囲気もギターケースでなんと50%は抑えられる計算だ。あと巨乳は馬鹿でエロい」

確かに、俺もギターケースを持ち歩けば、このくすんだ髪色もちょっと口ツクやつてるからワザと崩しましたみたいな事になるかもしない。「口ツクだからな」つていい言葉に思ってきた。

「言つてる」とはなんとなく解った。確かにいい考えだとおもう。つていうか最後星菜の悪口だろ絶対。」

「それに、音楽やつてる奴は馬鹿だから同類の音楽やつてる奴に対して大した警戒心も持たないだろ？」

おお！夜空の案がなんだかよく思えてきた。案だけ。

「それでは音楽店にいくぞ！」

「おう！」

そう言つて俺たちは意氣揚々と近くのモールの音楽店に行つた。

結果からいつて玉砕した。

店に着くまでの道のりで「一人でケースを持つたら2ピースというオシャレな響きでなお一層良いんじゃないか?」などと甘い事を話していたのだが、人ごみで夜空が人酔いをしてしまい、取りあえず店に着いたものの、どのケースが良いか等と話ていた時に店員が「ギターの形やらうんたらかんたら……」と聞かれ、「あ、自分の持つてるギターの

形の名前とかわからないんですね」とか言ってしどろもどろになつていた所、親切(迷惑)にもギター置き場に連れて行つてくれた後「このギターは良いですね」、試に弾いてみ

ますか?」などと、ほんとーに親切してくれたが、ギターなんて弾かないし、知らない人と喋るのは俺にとつて難しいため、黙つて「ああ、はい」とそつけない事を言つてたら、

店員さんが「俺のせいで氣を悪くしたんじゃないか」と思つたんだろつ、必死に楽しませよつ仲良くしようと頑張つている姿がとても辛かつた。その上、その店員が馴れ馴れしいと夜空に判断されたらしく、時たま聞こえる舌打ちと不機嫌オーラが俺を刺した。そして店員の隙を見て逃げるよつに店をとびだした。あれ、この計画つて夜空発案だよな。なんで俺が冷や汗だらだらなんだろう。

「帰る……」

夜空は背を向けて歩きだし、一度振り向き「気持ちわるい……」と言いい残し去つて行つた。

「…………

せめてあの気持ち悪いが俺に対して言われたことじやない事を祈る。

家に帰つたら夜空からメールが入つていた。

from夜空

今日は凄いたのしかつたよ！ありがとう。

小鷹ものすごい話し上手だつたから超盛り上がつちゃつたよ！

今日の私変じやなかつたかな？小鷹の隣にいても恥ずかしくならぬ
いよう私も頑張るね！

また一人で何処か行こうね。

とりあえず無視しました。

「呪いの類なのがなあははあはは」

次の日「テンプレでした。ごめんなさい。お詫びがしたいから今日
会おう」とメールが入つていた。
取りあえず用意して行くことにした。

「昨日は悪かつたな……」

待ち合わせ場所に行くと、夜空の第一声はそれだった。

「いや、別によく解らなかつただけだから怒つてもないぞ」

「だつてメール返してくれなかつた」

ちょっと俯くように呟いた。上田使いでチラチラみられるのはなんだか悪い気はしない。可愛いし。

「つーか、あのメールを返せないだろ。て言つかあのメールの真意をしりたい。」

「ななめ読みしてみる」

「あ？」

メールをななめに読み返してみる

今鷹の人

「え、なにこれ？」

「お疲れ。よし、今日こそ猫カフェだ！」

「反省の色なし！？」

いや、反省することもないのか？まあもういいや。面倒だし。心なしか夜空の顔が赤い気もするが、そんなに猫カフェに行きたかったのかこいつ。

「いらっしゃいませー」

「きやー！……可愛いなあ」

夜空は猫カフェに着くなり、出迎えに来た猫に飛びついていった。時間制の所なので、とりあえず1時間と店員に告げて席に着く。猫カフェの面白いところというか、テーブル席のほかに「タツ席」というのがあって、「タツに入りながら

猫とたわむれつつお茶を楽しむ席があり、とりあえず面白そうだったからそこに座る。当たり前だが掘りごたつではなかつた。とりあ

えず店員に「コーヒーを頼み、やつて来た

コーヒーを飲みながら、小鷹ミシュラン星3つなんて考えていた。ついでに小鷹ミシュランの最高得点は星5つだ。

夜空はエタツに入るなり、近くにあつた猫のおもちゃの中から猫じやらしを拝借して猫をおびき寄せていた。

こうやって猫と遊んでもうじるだけ見れば、こいつって凄い可愛いんだけどなあ……。

「それそれ……やん……やっぱり猫は可愛いなあ、いいね

「そういう部分をもつと見せれば凄い可愛いんだけどなあ」

で、こちらを向いていた。そうするとおもむろに俺に向けて猫じりをして、「お……」としゃべってみた。

「ベゼルハーブ、ベゼル、ベゼル」

汚えーー汚こよーひーーと思わず口に呟んだコーヒーをだらだら

「こんな感じかな?」

そんな顔を真っ赤にして無垢な顔して聞くのは反則だと思う。文句なしなのだが、なんかそのまま言うのは河か毎しい。

「…………さじめざ、ぜ」

なんとか言葉を絞り出しだが、なんて情けないセツツなんだわ。

」」」」

お互にそれ以上何も話せなくなってしまった。空氣も固まってしまった。

居たたまれない様な時間に先に負けたのは夜空だつた。

「小鷹は……こういう私ののがいいのか？……可愛いつて思つか？」

「……………残念とは思わなかつた」

自分でもなんて情けないんだらうと思ひ。こつもいの女として見て

とさせられる。

「なんだが、いつも残念に思つてたからギャツブに萌えるというか

▪▪▪

「ん……」
「む、残念とはなんだ。小鷹のくせに偉そうだ……萌えるんだ……ふ

「ああ、とてもいいと思つ

「じゃ、じゃあー！また見たいと思つかーー？」

「……ああ、また見たいとおもう」

「うーん、お前だけにしちゃねから磷酸で強くなる」

「か！？！」

「アラカルトヘルシーランチ...」

1話（後書き）

ありがとうございました。
この話は少しだけ長くなりそうですが、
私は夜空と理科が好きなので、次回はおそらく理科のういを書くと
思います。

「いやこうつ事お前だけにしてやるから隣に座らせろー。」

夜空に言われたこの一言は俺をフリーズさせるには十分すぎて。もう何がなんだかよく解らなかつた俺は色々な思いを駆せた後

「考えさせてください！……」

と、まとまらないままに沈黙に負けこんだ事を叫びてしまつた。

「んなー？」

「考えさせてください！……」

自分の顔が真っ赤なのが自覚できる。叫びたほうの夜空もさうなのだが、思いのたけをぶちまけた分だけ気持ちに余裕があるのか何か言いたそうだったが、こいつちはもう

どうしたらしいのか全く分からなくて同じことを叫んでいた。

「貴様！私がどんなに恥ずかしい事を言つたか理解できているのか！？」

「だ、だつて……」

とりあえず逃げたくなつて時計を見る。猫カフエの利用時間が後5分と迫っていた。ナイスタイミングで店員さんが「お時間ですが、ご延長なされますか？」と聞いてきた。正直もの凄い助かります！

「あ、清さ「延長1時間！……」

「あ、ありがとう」やこまく

といつて笑顔で去つていいく店員さん。夜空の大聲でちょっとビビンガっていた。可愛そうに。

「今日は逃がさんぞ！」

しかもなんだかノリノリになつて行く夜空。もう破れかぶれになつつあるのだろう。

「ちょっと待てよ！落ち着けよ…」

「落ち着けるか！私は…私は、まあまあからそつなれば良いと思つ

てた。もうタイミングを逃すのも小鷹に逃げられるのも「めんどく

思つたんだ」

「…………」

頭の整理が追い付かないもある。だけじ、こいつはそんな事を考
えてたのかとなんだか居たたまれない様な気持ちになつていへ。

「で

「でつて言われても

「どうだ

「ま、待つてくれ。そんなきなり答えなんか出せるわけないだろ。
まだなんか……現実感ない。と言つか整理もできでない」

「なら……待つてる」

そう言つて夜空は俺に考えりと言わんばかりに黙つた。睨みながら。
「なんだろう、言つてることはその…………要は……付き合つてくれつ
て事であつてるんだよな？」

言つてゐるも恥ずかしいが、もしもなにかの間違いで俺が勝手にこ
うこう風に思い込んでるだけかもしれない。しかし夜空は恥ずかし
そうに下を向くと「そうだ」といつてまた黙つた。

時間をくれると言つんだから考えてみる。

といつかこいつは何時何処でこんな事を思つよつになつたんだろう。
俺の事をその……好きだなんて、好きなのかあ、確かにかわいいし一
緒に連れ立つたら自慢にもなるよなあ。

あ、こいつ俺の彼女なんだぜつて良いよなあ。あ、でもこいつ相手
に絶対舌打ちする。ダメだな。

なんて貰つた時間もあまり有効に活用できないまま5分10分と考
えていると『ソラ』の事を思い出した。

小学生の時の親友。裏切られつつ裏切りつつの関係で終わつてしま
つた親友。でもお互いそれは勘違いだったと言つことでもう一応の
終わりを見たはず。

といつか目の前のこいつが『終わらせた』はずだった。

ソラの人生で唯一の友達。それに終わりを着けたのは夜空のはずだ。

「友達だった」と過去形にした夜空。俺はあの時に、ソラとの友情はもう無いものだと諦めた。

戻りたいと思ったが、ソラの事を忘れてた俺がタカを覚えていた夜空に出来ることは受け入れる事だけ。でも、それでいいと思ってた。夜空がタカはもういないと認めた上で

俺と関わりを持とうとするのは、タカが居なくなつた自分への慰めだと思っていたし、俺は昔の事で夜空との関係がなくなるのは悲しく思えたから関係は続けられたと思ってる。

それに自己満足だが、俺は過去に戻つてソラ謝れた。ソラに対してこの10年間を謝れた。薄情にも謝れたんだ。気は楽になつたし、夜空にもなにも後ろめたさは無くなつた。

でも夜空は？

あの時を引きずつてないのだろうか？いや、引きずつている。だから昔の事を蔑むことになると激怒するのだらう。そのことを夜空とちゃんと話さなきゃと思った。

20

「なあ」「なんだ」

冷めてしまつたコーヒーをすする。

「夜空は10年前の事をお前はどう思つてるんだ？」

夜空の顔色が少し変わつた。少し昔を懐かしむような、それでいて悲しいような。でもやっぱり怒つてるような優しい表情。

「楽しかつたよ。でも、やっぱり最後の日の事は理由がわかつても綺麗にはできなそつだよ」

「やっぱり恨んでるのか？」

「そんな事はない！」

少し声を張つたあと俺を慰めるように

「理由はもう解つてるからな。あの日に私がもう少し勇氣があつたらこんな事にはならなかつただろう。タイミングが悪かったと言つた『それ』がすべてだと思つ。」

それに…大事なことを言えなかつたのはお互い様だ

「そつか…」

「でもお前はいなくなつただろつ。その先はお互い孤独だつたんだ、

10年間

「転校前は友達いたけどな

「私は居なかつた！！！」

確かにソラ位信頼し合えるような友達は居なかつたけど、ちょっとした軽口のつもりで言つてみたら夜空の夢線に触れてしまつたらしい。

「あの日から私は唯一の友達を失つたんだ！裏切られたつて思つて当然だし私から逃げたとも思つた。引っ越しはしじょうがないとか色々考えたけど子供の頃だつたから私から離れようと

しただけなんだなとしか考えなかつた。誰もいなくて辛いときに楽しかつたあの頃を思い出して結局最後は悲しい思い出つて……」

夜空の目じりには少し涙みたいなものが溜まつっていた。

「……思つた以上に残念だつたんだな」

「うつさい。まあ小鷹が転校して来てお前も同じような状況だつたから胸はスッとしたがな。」

そう言つて「一ヒーを飲む夜空。ていうかスッとするつて。

「ただ一番ムカつくのは私があの日公園に行つていれば別にこんな辛い事も無かつたからだろうな。お前もこんな気持ちを味わう事は無かつたんだ。本当に申し訳ないつて思つてるんだ」
だからこれ以上あのことで責めないでくれつて言つてゐるよつにも聞こえた。

「全部私の所為だとも思つ。ただやつぱり田の事は頭で納得しようとしても10年も引きずつてしまつたからな。多分変えられない」「お互いがあだ名で呼び合つのが嫌なのはなんでだ」

「タイミングを逃した」

「はあ…」

逃したつてなんのだ。でもなんとなくあの時の事をお互い自分の所

為だつて思つてたつて事が嬉しかつた。相手を恨んだ事を差し引いても。

「タイミングを逃した」

「なんのだ」

「転校してきた時に小鷹がすぐ私に気付いてくれなかつたといひ」

「また堂々通りな……」

「だろう。でもアレだけ恨んでも小鷹の正体に気が付いたときに嬉しかつたからな。不思議な気持ちだつた。別にそれが恋心に発展したんだからお前の事は小鷹だ。」

いや、わからないぞ。恋心うんぬんはさて置きあだ名で呼べない訳つて結局なんだろう。

「いいんだよ。別に、お前が夕力で小鷹だからな。どつちも良いんだよ。とこいつか急に変えられても気持ち悪い」

「なら良いんだけど」

「だろ」

そういう感じ。昔の事を忘れる気もないし前に成長したくないのとか色々まざつてこいつなつたらしい。でもこいつあだ名大事にしてたよな。

「あだ名は友達同士で呼ぶものって言つてたよな。そんなに大事ならどうでも良いとか言わなくないか、普通」

「大事なものじゃないと言つたつもりは無い。ただお前とこう呼び合つようになつたら…意識しちゃうかなつて…。その頃にはす、好きだつたんだ」

ああ、そういう感じだつたんだ

「お互い意識してゐみたいで恥ずかしかつたと」

「つー……うん」

言つてゐることちも恥ずかしいけど…。なんかもの凄い嬉しい。こんな気持ちをなんて言えばいいんだろうかわからないけど。感謝というか。

「10年つてす」長い時間だつたな……」

こう思つてそのまま口にした。夜空も「そうだな」と言つて一人で笑つた。冷めたコーヒーを飲みながら。

変な関係だとおもつ。でも嫌な関係じゃなくて良かつたと思つし、無言で一人でいる時間が心地よく感じる。あの頃のしがらみが消えたような気がする。夜空もそつだと良くなつて思つ。

「ソラと友達でよかつたよ」

「私もタカと友達でよかつた」

そう言つてもう一度笑う。

「で、答えを聞かせてもらおうか。貴様途中で逃げられるとか考えなかつたか?」

逃げよつとはしてない。「いやむやにじよつとしただけだ。

「あー…すぐに答えは出せない」

「逃げる気か」

「そんなジト目で睨むな」

当たり前だがムツとした顔で居る。

「こんな事急に決めろつて言つぽつが無理だつて。やつぱり昔の事もあるし…すぐに決められない」

「そりか…」

「お前の事は可愛いと思つし、俺だけの物にしたいつて気持ちもあるけど。それで良いのかつて思つ部分もあるし」

ちょつと夜空が嬉しそうな顔をする。でも俺は、きっと。

「俺じや決められなによ」

とまた情けない事を言つて夜空をガツカリさせてしまつのであった。

「はあ…そんな事だとは思つてたけど…」

「す、すまん」

そんなこんなで猫力フュを出ぬこととした。夜空には本当に申し訳

ないがもつぱりじょうもなこと思ひ。ていうか罵られても仕方ないと思う。

「ふん、小鷹のヘタレを思えば」いつもとも考えてたからな…
…ほんと…

「すまん」

もつそれしか言えない。

「まあ良い。しうがない事だからな。…でも小鷹もタイミングを逃すなよ」

そう言つてニッと笑う夜空。

「ああ…」

「俺じゃ決められないと小鷹は言つたな
ん、と思い小鷹みると笑顔がちょっと悪戯っぽい物に変わつていてのを俺は見逃さなかつた。

「じゃあ少しの間は私が決めてやる」

そう言つて俺の手を引っ張つた。その顔があまりにも楽しそうだつたから少し見とれてしまつた。俺は夜空のこついう所は田が離せないと実感させられていくんだなつて思い出したら止まらなくなりそつだつた。でもそれも良いかなつて思つてしまつた。

ただその後はそんなに長くなかつた。夜空がいきなり人良いしだして、帰りたいとぶつぶつ言い始めたのだ。

「か、かえるか？」

「やだ……」

と言いつつも顔面蒼白な夜空を見ると大丈夫だとは思えない。あ、大丈夫とは言つてないか。ついでに笑顔はすでに霧散している。「どうしてこんななんなのよ……」

毎回の事だが隣人部のが頑張つて何かをするときは大概に残念な結果に終わる。そう、部を離れた所で皆が残念なのでこうなつてもしようがないんだろうなあ……

「残念どうしつてことで落ち着けよ」

「あ”あ”！？」

慰めたつもりが逆効果だつたらしく、睨まれてしまった。

「いや、でも限界だ！」

「……」

「やばくなる前に帰ろうぜ」

「…もうやばい。ついでに言つと握つてる手は今は気持ち悪さを誤魔化そうとしてるだけだ」

そういう事は言わないでほしかった。というか人ごみに入つてから段階式の圧力ソックスみたいに強くなつていったので気付いていたけど。

「どうか人気のないところに連れてけ……」

「わ、解つた」

とりあえず夜空の手を引いて公園に行くことにした。

取りあえず公園のベンチに夜空を座らせてから「ちよつと待つてろ」と言つて、急いで飲み物を買いに行くことにした。

「水でいいよな……」

公園を見る夜空が氣だるそうにこちらを見る。でも俺が気になつたのは、子供の姿が一人もない事だつた。日曜日だというのに。

俺らが小学生のころも大概空いてはいたが、よく見ると公園のブランコや滑り台ももう役所から見捨てられたのか、整備も特になく、後はただ取り壊されるのを待つていつのまにかがした。そんな事を思いながら、夜空のもとに行き水を渡した。

「ありがとう」

「気にするなよ」

と言つて寂しげな公園に田をやる。俺と夜空の思い出の公園じゃないが、ジャングルジムやブランコ、砂場などの遊具はあるものの、あの頃感じた輝かしさがない。

「寂しいな小鷹」

「どうした?」

「ふつ」っと一呼吸置いた後

「私どいるときに暗い顔をするな

「…お前キャラ変わりすぎだろ」

夜空の顔がボツと赤くなる。

「もう私は退路がないんだよ……」「うう、気持ち悪い。で、何

考へてたんだ」

そういうつて俯く夜空、俯いたら気持ち悪くなると思つんだが。

「公園も変わったなって」

「そんなことか」

そんなことつて。

「別に当たり前だろ。大人になつたら外で遊ばないでゲームばかりするだろ、子供だつて目の前にゲームあつたら外でなんか遊ばない」

「でもなんか、寂しくないか?良くな一人で遊んでたしな」

「またそれか。昔の事はもうやめよう。時間の無駄だしこれからの事を考えたほうが得だし私があんな事を言つた以上もう戻れない事を自覚しろ。……あとその事は謝らないぞ」

自分勝手にも聞こえなくはないけど……。でもやつぱり寂しいなとは

思つ。

「…すまん」

「うん、少し嬉しいから許す」

「そんな事つていつたり嬉しいって言つたりなんなんだよ
夜空は俯きながらこちらを覗いてきた。

「昔の事は私にとつても大事だ。だからお前も大事にしてる発言は
とてもうれしい。でも他人がどの公園で遊ぼうが私たちには関係な
いし、私は居なくなればいいとも思つてる」

「なんでだ?」

「そしたらなんか特別な感じするだろう。老人みたいな発言だが」「
そんなくさいセリフを吐いたのちにまた俯いた。夜空の言葉は少し
強欲というか独りよがりと言うか、そんな感じもしたけど、結局の
所俺との過去が良かつたで終わつた。

それと、戻れない事を自覚しろと言つた夜空の一言はきつかつた。
もつと生ぬるい所でグダグダとにかく柔らかい空気に守られていた
方が絶対に良かつた。夜空に告白されたのは衝撃だつたけど、正直
放り出されたような気がした。

「小鷹…、迷惑だつたか?」

「ん、なにがだ?」

何かなんかは解つてるけどあいつの口から聞きたいつて言つのもあ
つた。

「私たちはもう戻れないし、部室も…」

「うん。皆の雰囲気は壊れるつて思う。」

「後、この告白断つたら私は小鷹と上手く一緒にいれなくなる…」

「うん、部室から居なくなるべきはどつちになるかかもな」

「私はそれを知つて告白した。断りにくいのも知つてた
頭の回るこいつの事だからその位は考えてたんだろうな。」

「YesかNoのどつちでも戻れない。だから小鷹は一番なにかが
変わらなさそうな答案い選択肢を選び続けるだろつとも思つてる。
でもそれだと私は…嫌だ」

「うん……」

「でも小鷹はどうしたらいいかわからなって言つたよな。……

……だからこうする

「えつ？」

まだ気持ち悪いのがダラリとしたまま立ち上がり、俺の襟をつかんで引き寄せるとそのまま唇を重ねてきた。

ビックリしそぎてまた頭がパンクしそうになつたが、夜空の目をつぶつた顔のドアップと唇の柔らかさとか温もりとか……。あ、キスが気持ち良いのは一番顔で敏感な部分だかららしい、
後パーソナルエリアに入つてくるとかなんとかかんとか……。正直自分が何を考えていたとかそんな事より状況とかなんか凄いもうよく解んない。小鷹よく解んない。

長いようなどんだけか数えてないけど多分5秒位だと思つ。夜空がそのまま唇を離しておでこをくつづけてきた。

「判断材料だ」

恥ずかしそうに、でも妖艶な…俺にだけにしか見せない夜空なかもしれない。夜空は自分の唇を少し舐めた。夜空も緊張で唇が渴いてたからかもしれないと少し思つたけど違つた。

「私は小鷹の味を忘れないからお前も忘れないで欲しい」

そういうつて夜空は手を放した。

「望めばいつでもさせてやる…。だから少しでも名残惜しいと思つてほしいな…」

卑怯だ。忘れられる訳もないし……出来ればもう一度したいとおもう。

でも、もう一回をねだつたら……そういう事だ。

「夜空…」

顔は合せなかつた。あいつの顔は見てないが多分あいつもこつちを見てないと思う

「私は初めてだつたぞ！こんな所で恋人でも無い奴に対して無理やり唇を奪つたのが…私のファーストキスだ…。最低だな…でも、ビッチみたいな奴らとは一緒にしないでほしい」

なんだか饒舌な夜空の言葉を聞くと緊張とか羞恥とか自分の守つたものを捨てたのが色々頭を過つた。

「これでお前からちょっと昔を奪つた代わりに少しでもなつてくれればいいな…ダメか？」

「うー、ごちそうさまでした」

俺はまたパニックになつて訳の分からぬ言葉を喋つていた。少し自分が嫌になつた。でももう頭が回せる自身もなくつて、ただただ……夜空と一緒に居たいなつて思つてた。

別になにかやましい気持ちとかキスしたいとかじゃなくつて昔の事でもどうでも良い事でもなんでも夜空と話してみたくなつた。正直なところ、もう部活とかなんか色々な事が

夜空一色になつていて。キスされた位でこうなつてしまつ自分が情けないと思うがこうなつたらもうしようがないなつて思つた。

「ど、どうだつた。私のキ、キスは

「よ、良かつたです。うん」

「そつか、それはよかつたな…あはは…もつ一回したいと思つかる？」

「それは凄い思う…」

「良かつた…。私もそうだぞ…」

そういうつて顔をほころばせる。望んだらできるつて凄い条件だなしかし。もう一回夜空と…」う…。やめよう公園だ。

「まあ良かつたな！公園でまた良い思い出が増えたじやないか！」もしかしたら嫌な思い出になるかも知れないけど…。なんて失礼な事を少し考えてしまつた。

「帰るか」

「うん」

バス停に向かうときに夜空は俺の袖をつかんで歩いていた。小動物

みたいにそろそろと俺の袖をつかむ夜空は何とも言えない可憐で、俺はそれを振り払うなんて考えられなかつた。

特に会話らしい会話もなかつたのだが居心地は悪くなくて、バスに乗つてから家に着くまで夜空をチラ見した時に田が合つとなんだか顔がにやけてしまう。

そんな事をしてたらもうすぐ家の駅についてしまうんだなって思つとだんだん名残惜しくなつていつた。

「なあ小鷹」

言葉に出したのは夜空だつた

「もう少し一緒にいさせてほしい」

最後のほうはもう消え入りそうだつた。俺はうなずいて夜空と一緒に駅を降りた。

2話（後書き）

前回分をだいぶ追加させていただきました。
たぶん次でおわります

ありがとうございました。

バスから降りた俺らは特に行く当てなんて無かつたし、バス停回りに特に入る場所もないしどうしようかと迷っていたので「取りあえず散歩するか」と言つて、夜空も「それでよい」と言つてふらふらする事にした。

「夜空」

「なんだ？」

「んー、なんだ。そうだなあ…」

「特に話題が無いなら黙つていろ。その方が自然だ。それとも小鷹は会話が無いのは気まずいか？前にも結構あつたと思うんだが気まづかつたのか？」

「いや別に何時も気まずかつた訳じゃないけどや。わつこいつお前はどうだつたんだ？」

何時もは気まずいって思わなかつたのは多分夜空の事をあまり意識しないで居れたつて言つのが大きいからであつて、やつぱり色々した後だと意識せざるを得なかつた。

でも気まずいと言つよりは恥ずかしいとか……あ、これも気まずいつていうのか。

「トモちゃんと話してゐのを初めて見られたときは気まずかつた」「懐かしいなそれ」

そういうえば夜空と話すようになったのもあれからだつた。

「その後は一人で部室で居るときは私は本を読んでいたからな。お前の事を気にする事も無かつたから気まずくなんかなかつたぞ」そういうつて胸を張り得意げな顔をする夜空。確かにそうだつた気がする…

「二人で帰るつてのも無かつたしなあ…」

「一人になつたら小鷹が先に帰つてたからだろ?」

そうでした。なんにしても夜空は今そんな気まずさは感じていません

ようだつた。

「小鷹が気ままずい」といつの人は意識してゐるからなのか?」この私を

「……そりや そうだら」

あんだけされりや 気にしないって事にするのは無理だ。

「そりか、じゃあ手を繋ぐが」

「なんで!?」

そうかつて絶対おかしい!と思つ前に手を握つてきた。振り払う訳にもいかないのでなんかちよつとモヤモヤしながら受け入れた。

「ふふふ、お前がしたいと思つた事はお前からは出来ないもんなあ……今は!そしてそれをされたら拒めないもんなあ。悪くないぞ小鷹。お前から望めば私は受け入れるのをお前は

知つているのにそれはお前ができるない。くふふ……案外たのしいなあおい

「ぐつ……」

やつぱりいつ性格悪い!!

「悔しそうなふりして本当は私からそういう事して欲しいんじやないか?私からする分にはお前はノーリスクだしな。もしかして私が決めてやうつて言つた時から少し期待してたんじやないか?キスした時も頭のなかじや『夜空もう一回してくれないかな』なんて考えてたのもしれんな。おお、なんて事だ

「そんな事はないぞ……」

「ほおう、じゃあキスしたりしたい時は自分から言ふるのか?いやあ無理だらうなあ小鷹には。」

なんか凄い苛められてるけどなんで!?

「なんでそんな事言えるんだお前は?」

「そう思つて無いなら小鷹から私の手を握り返す事は無いだりつ。

今私はお前から握つてくる手に添えていくだけだからな。嬉しいぞ

小鷹。

「あつ

ホントだ……でもこれは

「小鷹は『本当はその気だけど俺からは踏み出せないから夜空が色々してくれないかな』って思つてくれているのだろう?安心しろ。

お前の考えていることは単純だからなあ。

本当はお前がしたい事だがしようがないから私がやりたい事にしてから色々やつてやる。小鷹はベタレだからなあ…しようがないから気にするな。」

「俺はベタレじゃない!」

そこまで黙つていたがさすがに黙つていられなくなつた。

「ほう、じゃあお前は自分から私がやりたい事をできるんだな?」

「あたりまえだ!!……あ

え、なんか話がスゲ変わつてる?私がしたい事?あれ?

「ふふふ……言質を取つたぞ小鷹」

「しまつた!/?言葉攻めはこの為か!?

もの凄い苛めつ子の顔してやがる。顔真っ赤だけど。

「ん、なんのことだ?いやー何をさせようか…なあ小鷹」

「わかつたよ…一個だけだぞ」

「まあ予想はつくだろ?キスしろ」

だよなあ……はあ、口元が緩むのがわかる。悔しいけどこんな可愛い奴からキスしろって嬉しい嬉しくない。

「ほら早くしろ。あ、唇を離すときは私のタイミングだからな」

そういうつて目を閉じて少し上を向く。え、ここで?なんか凄い色々

混じりこんだ笑顔で待たれてる。

「ちょ、ちょっとまた!」

「あ?やつぱりベタレです私はつて事か?私をその気にさせて置いてそういう事ができるつて言うのか?」

「いや、待つてくれ。せめて人がいないところでさせてくれ……」

そう、夢中だつたけどここは人が通る往来で周りに人がいない訳じやなかつた。夜空もそれに気が付いたのか「あつ」と言つて目をそらした。

「そうだ!家でいいか!?」

「つー？いいぞ！！」

俺の家の近くのバス停だったからここから5分もかからないし、小鳩はいるけど俺の部屋なら見られる心配もないし丁度よかつた。

「じゃ行こう」

「うん……」

なぜだか夜空の顔は真っ赤で繋いでる手を力いっぱい握りしめていた。結構痛かった。

はつー？これ墓穴じゃないのか！？

3話（後書き）

色々の話は長くなりそうになつてきました。
できるだけ早く終わらせられるよう努力します

母さんが見てたらどうじょう。総回診の様なあの足音が僕の鼓動を速くする。という曲が頭をよぎった、正直その気分だ。男子高生が一人で耽っている時のドアの外から聞こえる物音足音こんにちわ。僕の心臓は抨啓母さんよろしく速い。ゾクゾクするほど緊張感。思考の回転は酔っ払いの呂律なみの速さで、物事良く考えなさいと言つた誰かのアドバイスはとっくに消え去つてしまい…もうF-1のレーシングカーよろしく凄まじい速さで吹つ飛んでいく。ついでに頭に出てきた新しい事柄も同じように吹つ飛んでいく。人間は遙か太古の原人から知的生命体の頂点に陣を敷き、もっとも高度な文化を持ち理性と規律を重んじて本能とは別ベクトルで物事を考えられるようになった。そう、人間とは最強の群である。

要約しよう。極度の緊張でパニックに陥つてる。俺の思考回路はマックスハートズッキュンだ これもパニックで出たのだろう。

朝起きたら布団が汗でぬれていた。なんだ夢か。そうりやそうだ、あんな夜空は夜空じゃない訳で、俺も男子高校生特有の恋愛したい願望が夢となつて表れたのだろう。納得。

「どうしたんだ小鷹？」

そんなことなかつた。現実でした。
と言つのも……

あれから夜空を家に招いて、小鳩に「今日はつんこシスターじゃなくて夜空が遊びに来たのか？クククッ：良いだろう下等な人間を歓迎してやる。好きに計らうがよいぞ下等な人間」と

言つた後に「あんちゃん、今日のこはんなに?」と聞かれて思い出した。そういうえばもう結構な時間なのに俺たちは飯も食べずに歩き回つたりしていた。

俺は小鳩に会えて現実感が出たのか緊張の糸が切れたのかお腹の虫がなつてしまい、ついでに隣の夜空もお腹が減つていい様だったので「夜空も食べるか?」と聞いたところ頷いたのでご飯を作ることにした。

夜空が来ているとはい、特に豪華な夕飯が出来る準備などしていなかつたからパスタに毛が生えたような物とサラダ位だったが、普段は小鳩と二人での食事なので、会話もある程度決まつた内容なのだが、夜空が居ると言うのが新鮮で結構楽しかつた。

というかこいつ等仲良かつたっけ? 位に小鳩と夜空の仲は良好だつた。大概は夜空の小鳩いじりだつたが。

夕飯後は、俺が洗い物をしてる時、一人がゲームやり始めたので(当たり前のように夜空がボコボコにされてムキになつていた)それを鑑賞しながら楽しんでいた。時々小鳩が「復讐じや」と呟いていたのは聞かなかつたことにした。夕飯でイジられた事を根に持つていたのか?

そんなこんなで三人で遊んでたら、気付けばもう11時だつた。そんな時間に夜空を外に出すわけにもいけないので「泊まつてけよ」と言つたら「いいのか?」なんて言つていたが、マリアもケイトも家に泊まつた事もあるので、特に俺と小鳩は抵抗感も無かつた。夜空も「人の家にお泊りなんてリア充みたいだな」と満面の笑みを浮かべていた。

明日は学校なので、もう風呂入つて早く寝なきゃなと思い、夜空に「小鳩を風呂に入ってくれ」と頼み、夜空の寝間着が無い事に気付く(マリアの様に小鳩のパジャマを着せるわけにもいかないし)、風呂場の前から「俺のでいいか?」と聞いたら了承してくれたので、俺の寝間着を脱衣所に置いておいた。夜空が脱いだ服とかは見ないようにした。うん、見てないよホントに。

それで俺は「コーヒーを居れてリビングでくつろいでいた。風呂場からキャツキャと聞こえてくる声が心地いいのなんだが「幸せだな」なんてクサイセリフを呟いていた。

……なんだこれ？

落ちつて初めて気付いた事。夜空はマリアでは無い。夜空と昨日今日と遊んで色々あつた末に此処についてこんな状況になつてしまつた事を思い出してしまつた。団欒という魔力に魅入られて居たことを感じた。

そんな訳で、一人で「コーヒーなんて飲んで落ち着いてる場合じゃなかつたが、どうせ夢落ちだらうとタ力を括らうとした所で夜空に」どうしたんだ小鷹？」と話しかけられた所で現実に引き戻された。振り向いて夜空を見てみると俺のTシャツとズボンを着用してたのだが、上も下も少しづカブカブで何とも言えぬ。何とも言えぬ！

「ボーアイッシュユだな夜空

「それを言つたか!? そりや本物の男の服なのだからそうだらう」そういうつて夜空はTシャツの肩の部分を少し摘まんでハジき、「似合つか?」と聞いてきた。

「似合う?といふか…。俺のだからなあ、変じゃないぞ」

やるじやんつて言つたかつたが地雷っぽいからやめた。だつて元々中性的な夜空が男の格好してて、でも出るといひは出てたりで、もうたまりませんけどね。

そんなやり合ひをしてたら小鳩も出てきて「ククク…男への変化とはやるではないか…」と言つて夜空が反撃しているのを後目にそくさと風呂に逃げ込んだ。

湯船につかって体を触ると大分体が疲れて居ることが分かつた。や

つぱり人間は緊張するだけで疲れるんだなーとマッサージをやり始めて氣が付いた。風呂に長く居たら夜空が先に寝るんじゃないかと。俺もこんなに疲れてるんだからあいつも相当溜まっているはず。ふふ…逃げ切りか。そして体のマッサージを続ける事5分。

「小鳩は寝たぞ。人の家で一人は居心地が悪いから早く出てくれ。」

「…おー」

催促されちゃった。って言つ訳で、俺は観念して洗う所を洗つてから出ることにした。

「上がつたか」

「お前が早めに上がれって…。おい」

夜空は居心地が悪いと言つていた割に、勝手にお湯を沸かしてコーヒーなんぞを飲んでいた。夜空はとぼけた様な顔をして、「小鷹の分だ」ともう一つカップを用意してくれた。

「よくコーヒーの場所が分かつたな」

「雰囲気でわかるだろう。勝手に色々見たが気にするな」

「気にするわ！ つーかコーヒー苦ッ！」

「ん、人を家に上げると軽い家探しが始まると聞いたが違うのか？」
「ずいぶん尖がった意見！？」

でも確かにそんなイメージはある。家に人を上げるとは、そういう事を含めても上げて良いって思った人しか皆上げてないのか？なるほど、友達の特権か。

「夜空つて濃いコーヒーが好きなのか？」

「普段はアメリカンだがな。アメリカンはエスプレッソにお湯を加えるだけだからいつも最初は濃く入れるんだ」

そういえば外国のカフェではアメリカンコーヒーを頼むとエスプレッソにお湯を入れて出されるというのは聞いたことがある。
「なるほど」

「なかなか頭がいいだろ。今日は加える分のお湯を作り忘れただけ

だが

「ミスじゃねえか！！」

「気にするな、上手く作れたと思つが」

確かに味は良いのでそれ以上文句を言つのはやめにした。

「コーヒーが上手く入れられる前に料理上手くなれよ」

「あ”あ”

「“めんなさい”

地雷でした。

「だがな、私だつて努力していない訳ではないぞ。一応作れるのだ、味もそこそこ食べられるはずだ」

「え、夜空料理できないって言つてただろ」

いつかの合宿やら鍋の時も「料理などできるわけないだろ」と洗い物さえ拒否してたのに。

「私が書いた絵を見たことあるだろ」

「あのアソパソマソ風おにぎり君か」

「ああ。何の因果か知らないが、私が作るものは大概と言つていいほど見た目が悪くなる。私の料理を見たら驚くぞ、ヘドロみたいで」「それは…」

なるべく挙みたくない。というかイメージもあんまりわからない。

「テレビだつたらモザイクが掛るほどだ。だから食べなければ作つてやるが、多分食欲をそがれるぞ」

「そんなにか」

「味は大丈夫だがな」

怖いもの見たさで一回見てみたい様な気もするけど…

「料理教えてやるうか？」

「……いいのか？」

屈辱だとかなんとか呟いていたが、夜空に対してもアドバンテージがあまり無い俺はちょっと得意げだった。夜空は俺のカップが空にならうになる度、俺にコーヒーを入れた。コーヒーメーカーの中が空になるまで。

明日は学校だしそろそろ寝るか。

「あ、夜空の寝場所を考えてなかつた

さすがにソファーで寝かせるのも悪い気がする。

「小鷹のベッドに決まってるだろ?」「ひ

まあ…小鳩はもう寝てるし、こいつが一緒にベッドに入るとき起
こすのは悪いしな。俺がソファでねるか。

「わかった。俺の部屋はあっちだから。勝手に部屋を漁るなよ

そういうつて俺は自分の掛布団を用意しに押し入れに向かおうとした時

「小鷹もに決まってるだろ?」

と悪戯な笑みを浮かべている夜空を見た。
ですよねー。

4話（後書き）

読んで頂いた方々ありがとうございました。
この話はすぐに終わって次は理科の書について思っていたんですが、
自分でも長くなつて驚いてます。
できるだけ綺麗な終わり方を目指したいのでもう少し頑張らせて
いただきます。
失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0058ba/>

「嫌な事は出来るだけ見ないように」

2012年1月10日17時00分発行